

第 26 回日本語文化学研究会報告

7月5日(土)午後一時半より行われた第26回日本語文化学研究会は、本年度より会長となった岡崎眸先生の挨拶で幕を開けました。はじめに総会が開かれ、議長選出と会計報告が行われた後、2名の発表と特別講演会が行われました。

最初の発表は、単娜さんによる「中国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の習得に関する研究—ダイクシスと照応を統合した観点から—」でした。単さんは、上級の日本語学習者においても誤用の目立つ指示詞「コ・ソ・ア」について、これまで明らかにされていなかった日本語母語話者と学習者の使い分け傾向の相異を明らかにし、また、現場指示と文脈指示の全てをカバーした各指示領域について、学習者にとっての難易度順序を提言されました。

続いての発表は、オーリ・リチャさんによる「『共生』を目指す地域日本語教育の批判的再検討—母語話者の「日本人は」のディスコースから—」でした。リチャさんは、地域日本語教育で提案されている「共生」や「対等」な関係を目指す相互学習の場をフィールドに、「日本人は」というディスコースが引き起こす日本語母語話者と非母語話者の力関係をクリティカル・ディスコース・アナリシスの手法を用いて分析し、その生成過程を明らかにされました。

特別講演会は、お茶の水女子大学文教育学部教授の西尾道子先生による「(英→日)字幕翻訳の世界」でした。日英の通訳や翻訳がご専門である先生は、聖書のように厳密な翻訳と対照し、小説や映画字幕に見られるダイナミックな翻訳について、多くの例を挙げながら解説して下さいました。英語学という異なる観点からの、機能や受け手の印象を重視した自由な翻訳というのは、日本語教育においても非常に応用価値のある大変興味深いお話でした。

本研究会は、多くの皆様方のご協力を賜りつつ、有意義な研究会を目指しております。今後も皆さまのご支援ならびにご応募をお待ちしております。

(河野麻衣子)